

○セリ、タイム、ローズマリーあたりがスूपレシビの本には出てくる。ほかのハーブが出てきても代用が可能だから、それらだけ植えておけばいいようなものではある。でも、繰り返し浮かんできかたないのがサイモンとガーファンクルの「スカボローフェア」で、「パセリ、セージ、ローズマリーアンドタイム」と四つ並んで小学生の頃からインプットされている。たぶん死ぬまで抜けない。てつきりスカボロー市でそれら売っていた、という歌詞だろうとずっと思っていたが、実ることのない恋を綴った歌詞に挿入された、おまじないみたいなものというのを後に知った。どことなく呪術めいた響きがあるのは、そのせいかな。だから使うあてもないのに、セージも植えた。おまじないの威力に屈服したというわけだ。

だが、サルシッチャを作るに当たり、ソーセージにセージは付きものと知った。勇躍セージの出番とあいなったのだが、ずつとスカボローフェアの術中にはまったままという気がしないでもない。

ついでに、ソーセージとは、セージからその名を得ているのではといささか興奮を覚えた。調べてみると確かにその説もありはするが、はつきりしない。ソーセージもサルシッチャも語頭の部分は塩を意味し、どちらも塩味肉といった意味らしい。

適当に刻んだ肩ロースと挽肉にハーブ類と塩こしよを混ぜる。後は寝かせて、茹でて、焼くだけなので、この時点でほとんど出来上がったようなものだ。塩を肉の一パーセント入れるほかは、何をどう入れようと成立するので、作り手の裁量に委ねられた部分が極めて大きい。欧州には、ソーセージの前身は肉屋と神様しか知らない、という言い回しがあるのだが、怪しげなことをしようと思えばいくらでもできる代物ではある。

サルシッチャは、混ぜた肉を腸に詰める。小説では、家族総出で賑やかに作る場所が描かれていて、読んでいるこちらまで幸せな気分になった。昔見たエルマンノ・オルミの『木靴の樹』を思い出した。悲しい映画だったけれど。

腸などあるわけないので、サラランラップで代用する。くるくると包んで冷蔵庫で一日置き、それをさらにアルミホイルでくるんで茹でる。仕上げは、フライパンにオリーブオイルをひき、焼き目を付けてできあがりである。形状はさておいても、純度だけは誇れる。日本農林規格に照らしても、特級に相当する。反省すべき点は数あれど、申し分のない美味であった。二回目を早く作りたいたのだが、いかんせんハーブの成長が追いつかない。



専業ババ奮闘記 (その2) 101

木幡智恵美

新学期 (3)

新学期がスタートして間もない頃のこと。このところ、日中は点訳をしたり、娘や息子たちの部屋のクローゼットを中心に片付けたりしている。

その日は、実歩と宗矢の保育所迎えと寛大の児童クラブの帰りの迎えを頼まれていたのだ、それまでに夕食の準備をと台所でござごそしている、娘から電話が入った。「保育所の関係者にコロナ感染者が出たそう、五時から説明会があるに。仕事早退して説明会に出ることになって、実歩と宗矢の迎えはいいけん。寛大だけ、児童クラブから連れて帰つてもらえん」とのこと。義母が亡くなったのは第三波の最中で、少し収まったと思つたら、三月末からまた増え始め、今は第四波の最中。コロナがじわじわと近づいてきた感じだ。

保育所の説明会を終えて寛大を迎えに我が家に寄つた娘は、実歩と宗矢を車に乗せたまま、マスク越しに、「明日実歩と宗矢はPCR検査を受けるに」と言う。こちらもマスク越しに、「寛大を休ませるなら、明日畑に連れて行こうか」と言つて、その夜孫たちに食べさせるはずだったロールキャベツの入ったタッパを渡した。娘は、「また、連絡する」と、早々に子どもたちを車に乗せて帰つていった。

翌朝、一家全員仕事や学校、保育所を休むとの連絡が入る。可哀そうな寛大、入学式後、学校に通つたのはたった三日だ。夫と畑に向かい、帰りに収穫したエンドウ豆を渡しに娘の家に寄る。「ごめんだけど、忠ちゃんと実歩と宗矢の薬をもらいに行つてくれん。感染の可能性があるけん、家族以外の人に取りに来てくれつて」ということで、帰つて耳鼻科と薬局に寄つて薬をもらい、娘の家に届けた。

その夜電話があり、全員陰性で、娘も忠ちゃんも明日は仕事に出、寛大も学校に行くけど、保育所は休所になるので子守を頼むとのことだ。

翌朝、玉湯に子守に行く。咳の出る実歩と、熱のある宗矢相手、しかも雨ときている。熱のせいかな、宗矢は午前少し、夕方に二度目の昼寝、その間は実歩とトランプをしたが、それ以外は家の中の探検だ。二階の子ども部屋に行つたり、一階でお絵描きをしたり。一日の長いこと、長いこと。もう、コロナはこりこりだ。早く収まってくれないかなあ。

30代フリーター やあ、ジイさん。佐藤武嗣という朝日新聞の編集委員が「空文化する『専守防衛』」と題した解説記事で、岸田政権や自民党が「専守防衛」の看板を掲げたまま「敵基地攻撃能力」の保有を指摘しているのは「国民を欺くような手法」と批判していた（5月30日朝刊）。

年金生活者 たとえ「空文化」した看板であつても下ろさないでいるのは、「国民を欺く」ためという以上に、看板そのものが他国に対する一種の「抑止力」として働くことを期待しているからだと推察される。

「専守防衛」は負けてから白旗を上げる代わりに、戦う前にあらかじめ白旗をあげておき、もし他国が攻めてきたら、白旗を下ろして自衛権行使の戦いを始めるといふ、通常の逆を行く戦略だ。

白旗を上げている相手を攻撃するのは罪悪感をともない、他国から非難もされる。たいていの国はそんな相手を攻撃するのを控える。そこには目に見

来最高で、他方「野党に期待できない」は80%にも及ぶ（5月23日朝刊）。

年金 あり得ない想定として、野党第1党の立憲民主党を中心とした連立政権ができたと仮定してみる。内政も外交も自民党と大差のない政策を自民党より下しくそにやるだけだろう、と国民は思うに違いない。

岸田政権の内政の基本は財政赤字を増やして需要を喚起する「大きな政府」路線だ。「新しい資本主義」という看板を掲げていても、中身は従来からある政策のひとつだ。それがいま世界の潮流になっていて、岸田政権もそれに乗ったという以上の意味はない。

立憲民主党も基本路線は「大きな政府」であり、万が一にも政権を取ったとしても、骨組みにおいて岸田政権と明瞭な違いのある政策を打ち出すことは考えられない。不慣れなぶんだけもたつのが自民党とのいちばん大きな違いということになりかねない。

外交は「緊密で対等な日米同盟」を

えない「抑止力」が働いているとみなすことができる。それでもまれに攻撃してくる国があるかもしれない。そのときに備えているのが自衛隊と日米同盟という、目に見える抑止力だ。

「専守防衛」のもとになつてきた憲法9条を私は赤ん坊にたとえて考えた。赤ん坊は争う気も、その力もない。その無垢さ、無力さを前にしたとき、ふだん粗暴な人間も「この子だけは傷つけてはいけない」と、守ろうとするだろう。だが、まれに危害を加えようとする者はいる。それを阻んでいるのが親や周りの大人の力だ。自衛隊と日米同盟はそれに相当する。

30代 日米首脳会談の結果をめぐって朝日新聞の社説が「単に追従するだけではない、日本自身の主体的な対中政策が問われている」と書いていた（5月24日朝刊）。

年金 では、なぜ書かないのか。日本が「主体的」に振る舞うには、外交・安全保障の基軸を日米同盟にではなく、憲法9条に置かなければなら

掲げて政権交代を果たした旧民主党の路線から外れるはずもなく、自民党政権との違いは程度の差にとどまるだろう。独自性を出そうとすれば、鳩山政権のように霞が関の激しい抵抗に遭つて公約破りをするはめになり、もたつてくぐらうでは済まなくなる。

30代 だれの目にも明らかなのは、この党には実行力が欠けているというこ

い、と。

日米同盟と9条はこれまでワンセットの存在としと扱われてきた。どちらが主でどちらが従かという観点から見ると、日米同盟は9条の「非戦」という目的を達成するための手段の位置にあり、主はあくまでも9条だ。そこからおのずから導かれる外交・安保の基軸は、日米同盟ではなく9条ということになる。

それを実行に移すことができれば、日本政府は自国の不利益になるようなアメリカの要求を押し返す力、沖縄の過重な基地負担の解消や不平等な日米地位協定の改正に向けて交渉する力を手にすることができるようだ。政治家やその集団の「主体的」な実行力を担保するのは確固とした理念であり、わが国が世界にアピールし得るほとんど唯一と云つていい国家理念は9条の非戦・非武装の理念だからだ。

30代 そんなことができる情勢にはほど遠い。朝日新聞の世論調査では、岸田内閣の支持率は59%と、政権発足以

とだ。

年金 それは経験不足だけから来ているのではない。国民に届く確固とした理念を持つていないことがそれに劣らず大きい。

旧民主党にはまだそれらしいものがあつた。小沢一郎が唱え続けた「国民の生活が第一」にそれが表現されている。立憲民主党はその看板さえなくした。もしこの党が本気でそれを掲げるなら、岸田政権と同じ「大きな政府」路線をとるにしても、いろんな場面で自民党を凌駕する可能性がある。

外交の基本として立憲が掲げる「健全な日米同盟」は旧民主党の「緊密で対等な日米同盟」にくらべてあいまいであり、自民党政権以上に対米追従に陥る恐れさえ感じる。それを乗り越えるには外交・安保の基軸を日米同盟から憲法9条に移す以外にない。沖縄に在日米軍施設の7割が集中し、治外法権的な日米地位協定が改められない日米同盟の「不健全」を「健全」に変えるにはそれが不可欠だ。

ニュース日記 833  
中村 礼治

## 9条の威力をあなどつてはならない